沢田眉香子「京都新聞」土曜版、京都新聞社、 2022 年 1 月 22 日

Mikako Sawada, *Kyoto Shimbun*, Saturday Edition, The Kyoto Shimbun Co., Ltd., January 22, 2022

京都新聞

1月22日

土曜日

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

美術

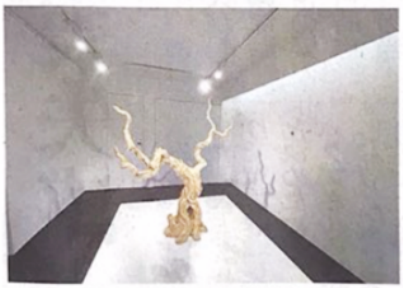
ギャラリー

「そっくり」に潜む寓意

エリック・セリテラ展

豪快な枝ぶりの枯木、皮のめくれた白樺（しらかば）、幹や年輪に亀裂が入り、干からびた苔（こけ）が自然の経年変化を見せる。アメリカ人アーティスト、エリック・セリテラの「木にそっくり」な陶芸作品だ。手捻りで成形し、凹凸を削り、顔料や酸化物などで何度も色を重ねて焼くことで、風化した木を写実的に再現している。

「本物そっくり」といえば、初代・宮川香山の高浮彫（たかうきぼり）の陶器や安藤緑山の牙彫のような明治の超絶技巧が思い浮かぶが、そうした作品は「そっくり」ゆえに、不当に低い評価をこうむってきた。



エリック・セリテラ展より

アクの強い画風で鳴らした曽我蕭白は、「絵を望めば私に、絵図を求めるなら円山応挙に」という言葉を戯れに放ったと伝わる。これが、蕭白が、精緻な写生を重んじた円山応挙を揶揄（やゆ）した発言であるかのように解釈されるのは、「そっくり」より、個性こそがアート、という現代の価値の反映であろう。

古今の「そっくり作品」には、時代や作家によって様々（さまざま）なコンセプトが伴う。応挙の時代には、当時の新しい視覚ツールである写真やレンズに人の感性を沿わせることだったかもしれず、現代なら手によるデジタル画像への挑戦かもしれない。

セリテラはどうか。よく見ると作品には、現実の木にはあり得ない繊維の流れや、妖しいシルエットが見て取れる。誰もが親しみをもって眺める木の姿を介し、観客との共振を呼び起こしたうえで、自身の自然観、寓話（ぐうわ）性をぶつけているかのようだ。「そっくり」さを極めながら、セリテラは「アートとは私の手によって語られる、私の潜在意識の物語」と言う。作品はメトロポリタン美術館などに収蔵されている。（艸居＝古門前通大和大路東入ル）

2月26日まで、日月休）

（沢田眉香子・著述業）

□ □ □

現代美術　艸居　〒605-0089　京都市東山区元町 381-2
Sokyo Gallery 381-2 Motomachi, Higashiyama-ku, Kyoto, Japan 605-0089
T: 075-746-4456　F: 075-746-4457　info@gallery-sokyo.jp　www.gallery-sokyo.jp